



## 名前の話

生命金属研究の仲間であり、東京大学の若き教授である鈴木道生先生から、「リレーエッセイのバトンを受け取ってもらえませんか？」との連絡をいただき、「私よりも、若手の先生に繋いでいただく方がよろしいのではないのでしょうか。」と一度はお断りしたものの、今一度若手になったつもりで何か書かせていただこうかと思ひ、引き受けさせていただきました。千葉大学の小椋です。

シンガーソングライターの小椋 佳さんや、バドミントンのダブルスペアのオグシオの小椋久美子さんらのお陰で、最近「小椋」という名前を間違えられることは少なくなりました。しかし、電話で「“おぐら”の漢字は、“小さい”に“木ヘンに東京の京”です」と説明しても“小棟”（それは東京の東ですな）とか、電子メールの際にありがちな“小椋”（画面では見づらいのでしょうか、それは手ヘンです）とか、“小鯨”（ご丁寧に“オジラ”とフリガナが書いてあることも）とか、最近でもたまに出くわします。調べてみますと、巨椋と書いて“おぐら”と読む姓もあるそうで、そうすると小椋は“おぐら”とふりがなを振るべきか悩んでみたりもします。ちなみに小椋という姓は、木地師（お椀やお盆などの木工品を製造する職人）に多いそうですので<sup>1)</sup>、“椋”が木ヘンであることも何らかの関係があるのではないかと考えています。しかし、名前のルーツは木地師かもしれないませんが、自分自身では“職人氣質の研究者”というよりは“営業職的な研究者”ではないかと自身を分析しています。

また、1994年に初めてOriginal Paperを発表した時以来、私の名前の英文表記はOguraではなく、Ograを使っています。当時の文献検索は、冊子体のCurrent Contentsを使っておりましたが、著者検索をしたときにOguraよりも先に出てくること、英文表記した時に同姓がないのではということ意識してOgraにしました。今となってはインターネットで検索するので、最初に出てくると言う効果は意味がなくなりました。PubMedで検索してみると、免疫学の分野でPearay L. Ograさんという研究者がニューヨークにいらっしゃいました。恐らく、木地師をルーツに持つ方ではないと思います。

ちょっと古い話ですが、ぶんせき誌の2008年の表紙は元素の周期表を背景に、B（ホウ素）、U（ウラン）、N（窒素）、Se（セレン）、K（カリウム）、I（ヨウ素）をハイライトし、BUNSeKIという名前を紡いだものでした（図）。非常に目を惹くデザインで、周期表がモチーフとなっていることから生命金属研究者としても嬉しく思っていました。これに触発され、自分の名前

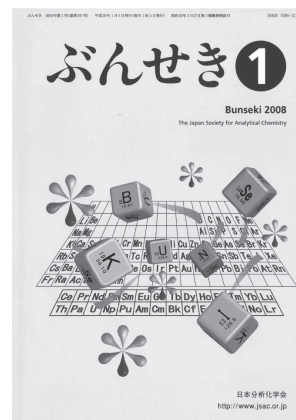


図 2008年の“ぶんせき”の表紙

ある“Ogra”も元素を並べてデザインできないものかと思っておりましたが、2008年当時はどう組み合わせてもOgraを表現することができませんでした。ところが、2016年11月にNh（ニホニウム）が命名された時と同時に、原子番号118、現時点では最も原子番号の大きい元素としてOg（オガネソン）が命名されました。名前の由来は核物理学者のユーリイ・オガネシアンとヘリウム以外の18族元素の語尾がonで終わっているということを組み合わせて、オガネソンと決まったようです。ともあれ、これによって晴れて私の名前をOgとRa（ラジウム）を組み合わせて“OgRa”と表記できるようになりました。詳しいことは理解していませんが、元素は一説によると、原子番号173の元素まで存在可能なようです。現時点では、118番目のOgまで命名されていますが、119番目以降173番目までの55元素はまだ命名のみならず、その存在自体が確実に確かめられていない元素です。どのような由来で元素名が決まって、どのような元素記号になるのか楽しみです。まだ元素記号でご自身のお名前を綴れない方には、今後の元素の発見と命名が待たれるところです。

永年の生命金属元素研究の功績が認められ、新元素に私の名前に由来した元素（例えば、オグリウム）ができたとしても、残念ながらその元素記号はOgにはなりません。（そんなことを残念がる必要は全くないのですが！）

今回は、株式会社バイオデザインにお勤めで、元同僚の安部寛子先生にバトンを渡したいと思います。（元素記号で“Abe”は今のところ表現できませんね）

1) 桐村英一郎：“木地屋幻想 紀伊の森の漂泊民”，(2020)，(七月社)。

〔千葉大学大学院薬学研究院 小椋 康光〕